

# 古今集に於ける

「ぬ」と「つ」

国文四年 中村 楷 子

一般に完了の助動詞と云われている「つ」、<sup>二</sup>「ぬ」については、従来、さまざまな角度からさまざまな見解が述べられて来たが、最近（三十二年度）「国語国文」の才二六卷八号に発表された中西宇一氏の「発生と完了——ぬ、つ」の一文は氏の優ぐれた卓見であつたと思われる。

本稿はその甚だつたない統貂の私案である。しかしながら、ここで私は、「つ」、「ぬ」の本質を時間的、空間的に広い範囲に亘つて詳述するつもりはない。即ち、これから述べようとするところは、平安時代の、しかも、「古今和歌集」と云う限られた作品に於て、若干の考察を試みたものである。

## 二

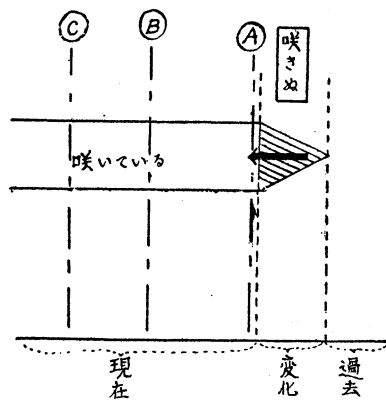
さて中西氏は、前述の「発生と完了——「ぬ」と「つ」（国語国文所収）の中で『ぬは状態の発生を示し

○ 我が待ちし秋萩咲きぬ 今だにも

にほひに行かなをちかた人に

（萬十、二〇一四）

このようにAからBへの変化に於いて、Bの状態が発生した事を意味するものであり、従つて、「秋萩咲きぬ」は「今は秋萩が咲いていると云う状態になつた」と云う現前の状態が発生した事を示すものである』としてその意味を次の如く図示された。



然しながら、氏がみずからの説明の上で「今」と「現在」との観念を混同して用いている事実を看過するわけにはゆかない。（図参照）何となれば氏の云う「現在」とは、時間的に漠然とした過去に対応するところのものであり、その内容に、かなりの時間経過を含み得るのに対して、一方「今」と云う概念は瞬間的時間それ自身であり、そこには僅かな時間の流れしかない。従つて作者の視点が、いかなる位置にあるかと云う事によつて、(A)の瞬間が今になつたり、(B)の瞬間が今になつたり、(C)の瞬間が今になつたりする。

更に氏は『「ぬ」における発生状態は変化時より、現在、未来に亘つてその状態を持続する。』と説明を加えて

にほひに行かなをちかた人に

(萬十、二〇一四)

いる。

然し、ここに「ぬ」の本質を云々するに當つて最も重要な事は今の瞬間(たとえばAの瞬間)における状態そのもの、つまりその瞬間に、いかなる状態が作者の眼前に展開されているか、と云う事に限られるのではあるまいか。これは㊸㊹の瞬間が今になつた場合も同様に云える事である。花びらが、ほころびそめてから、完全に開花しきつた瞬間に、この花を見た場合は、視点㊸、㊹の瞬間に今、と云う事になり、この人にとつては、氏の云う、それ以後の継続状態は、さし当つての対象となり得ないし、又少くとも表現の中心ではない。むしろ、この事は、自然科学の方面でも取り上げられるべき問題であらう。

この事は、次のような「ぬ」を考える事により、一層明らかになる。

○ 今よりも秋づきぬらしあしびきの

山松かげにひぐらし鳴きぬ(萬十五、三六五五)

について、氏は「鳴くと云う一回限りの動作が現れた事により、今後もそう云う動作が、続いて現れ得る状態になつたと云う状態発生を意味する」と云われる。

そこで「秋過ぎぬらし」の「らし」と云う助動詞について見るに

○ 桜花咲きにけらしなあしひき

山のかひよりみゆる白雲(古今集春上 59)

更に氏は「ぬ」における発生状態は変化時より、現在、未来に亘つてその状態を持続する。」と説明を加えて

○ さ夜なかと夜はふけぬらしかりがねの

きこゆる空に月わたるみゆ(古今集秋上 192)

○ たつた川もみぢは流る神なびの

みむろの山に時雨ふるらし(古今集秋下 284)

○ 降る雪はかつぞけぬらしあしひきの

山のたぎつせをとまさるなり(古今集冬 319)

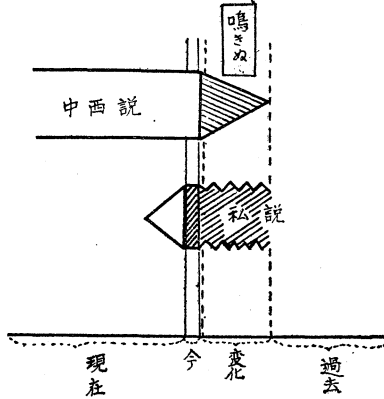
など、「あしひきの山のかひより見ゆる白雲」、「かりがねのきこゆる空に月かたるみゆ」、「たつた川もみぢ葉流る」、「山のたぎつせ音まさるなり」がそれぞれ「らし」によつて、あらわされる推量の根拠をはつきりと示している。しかも、「みゆる白雲」、「月わたる見ゆ」、「もみぢ葉流る」、「音まさるなり」は、作者が今、実際に、目で見、耳に聞いて経験している現象であり、換言すれば、今、作者が経験している或る事柄にもとづき、いまだ経験せざるものを推量しているのである。このような用例は古今集に於いて枚挙に遑がない。

そこで先きに中西氏のあげた用例「今よりは秋づきぬらしあしびきの山松かげにひぐらし鳴きぬ」も、この「らし」の機能に違ふものではない。つまり「ひぐらし鳴きぬ」は過去の事でもなければ、未来へ続く状態の発生でもない。今、この瞬間に於て、作者がひぐらしの声を耳にしている状態なのである。云つてみれば、「ひぐらし鳴きぬ」と「秋づきぬらし」と云う推量とは同一時限にあり、

こお考える事によつてはじめて「今は」と云う言葉も理解されるのではなからうか。

従つて、氏の云う未来への状態発生説は、全面的に否定されないまでも、少くとも、この表現の中心から遠い。

この事は、氏が常に、表現の全一的な意味的統一、もしくは、統一の意味のあらわれとして「ぬ」を取扱つていないところに基因すると思われる。



古今集中には次のような「ぬ」の用例が見える。

○ なげきこる山とし高くなりぬれば つらづゑのみぞまづつかれける

○ 磯のかみふりにし恋のかみさびて たゝるに我はいぞ

(雑歌 1056)

ねかねつる

(雑歌 1022)

○ あまの川あさせ白浪たどりつゝ、渡りはてねば明けぞしにける

先ず才一例の「ぬ」は、これは今よりも前の或る時期において、歎が積りはじめ、時間の経過と共に高まつて、丁度今、その極限に達している事を意味するものである。何となれば、「つらづゑのみぞまづつかれける」と云う状態は、歎きが極限に達した時にして、初めて、自然に生まれ出て来るのではなからうか。才二例の「ぬ」は、単に古くなつてゐる恋の意味ではなく、あまりに年久しくなつてゐる恋、つまり恋が古い状態の極限にある事を云つてゐる。何故と云うに、下の句の「たたるに我はいぞねかねつる」——恋が神怪化してたたと云う事は、氏の云う「古くなる状態が発生した」程度でおこり得る状態とは考えられない。この古いは、よほど古いのである。才三例の「ぬ」も「明け」の状態が、今極限に達している事において例外ではない。過去の或る時期に明け始めた夜は、今作者の眼前にすつかり明けはなれてゐるのである。つまり、「明く」と云う言葉で表現し得る最も顕著な状態に今あるのである。従つて今、明くと云う状態が発生したのでもなければ明けてしまつたのでもない。

以上の事から「ぬ」は今における極限の状態をあらわすものと考える。たとえば

づつかれける

(雑歌 1056)

○ 磯のかみふりにし恋のかみさびて たゝるに我はいぞ

以上の事から「ぬ」は今における極限の状態をあらわすものと考える。たとえば

○ 山ざとは冬ぞさびしさまさりける

(冬 316)

○ きみがうへしひとむらすゝき虫のねの

○ 唐衣きつゝなれにしつましあれは

はるばるきぬるたびをしぞおもふ (霧旅 410)

○ あれにけりあはれいくよのやどなれや

○ あさつゆをわけそぼちつゝ花みんと

今ぞの山をみなへ知りぬる (物名 438)

○ しらつゆも時雨もいたくもる山は

○ きみこふる涙のところにみちぬれば

みをつくしとぞ我はなりける (恋二 567)

○ したばのこらすいろづきにけり (秋歌下 260)

○ 玉かづらはふ木あまたになりぬれば

たえぬ心のうれしげもなし (恋四 709)

以上の「けり」が示しているものは、「立ちみつ」、「かげと成る」、「荒る」、「色づく」など、作者が今、眼前

○ しらゆきのやへふりしけるかへる山

かへるがへるもおいにけるかな (雑歌上 902)

が、あまりに甚敷しい(極限の状態)事に対する感動ではなからうか。これと同例に考えられるものが、本集中には、「ぬ」の用例総数(265例)の約32.3% (86例)もあるのである。

○ おほあらしきのもりのしたくさおいぬれば

こまもすさめずかる人もなし (雑歌上 882)

又助動詞「き」を伴った「ぬ」について氏は、「過去

はいづれも、過去に発生したそれぞれの状態が、時間の経過と共に、質的、量的に増大し、今その極限の状態にまで達している事を示すものである。

この事は、普通に詠歎の助動詞と云われている「けり」が、圧倒的に「ぬ」に多く接続している事実をみても或る程度うなずける。

に於いて、その状態をとらえねば、無意味味であらう。

○ きみにより我なは花に春霞

野にも山にもたちみちにけり (恋歌三 675)

○ きみまさで煙たえにししほがまの

○ こひすれば我身はかげと成りにけり

うらさびしくもみえわたるかな (哀傷 852)

○ むらどりのたちにし我名今更に

○ きみにより我なは花に春霞

野にも山にもたちみちにけり (恋歌三 675)

○ むらどりのたちにし我名今更に

○ こひすれば我身はかげと成りにけり

うらさびしくもみえわたるかな (哀傷 852)

○ むらどりのたちにし我名今更に

○ ほととぎす峯の雲にやまじりにし<sup>◎</sup>

○ ありとは聞けどみるよしもなき (物名 447)

○ みよしのの山のしらゆきふみわけて

○ 入りにし人のをとづれもせぬ (冬歌 327)

○ わが待たぬ年はきぬれど冬草の

かれにし人はをとづれもせず (冬歌 338)

勿論、私はこの場合も、「ぬ」が或る極限を示す事は疑われない。ただ、極限に達する時期が今より前にある為に、時間的にかなり以前から眼前の極限の状態が続いて来ている。云いかえれば、状態が過去の或る時期に極限に達し、以後同質の状態が今迄続いていると云う事である。

#### 四

他方「つ」も今と云う時限を中心に考えるので、この点中西宇一氏の云われる「単なる完了」とは多少見方を異にする。

才一に考えられる事は、近い過去に発生していた状態、動作が今より僅か前に完了する瞬間的完了の場合。たとえば

○ 折りつれば袖こそほへ梅花 (春上 32)

○ ありとやここにうぐひすのなく (春上 32)

○ 鳴きわたるかりの涙やおちつらん

○ 物思ふやどのはぎのうへの露 (秋上 221)

○ 我が来つる方もしられずくらぶ山

○ 木々の木の葉の散るとまがふに (秋下 259)

○ 思ひつゝぬればや人の見えつらん

○ 夢と知りせばさめざらましを (恋二 552)

○ 枕より又しる人もなきこひを

○ 泪せきあへずもらしつるかな (恋三 630)

○ おきもせずねもせでよるをあかしては

春の物とてながめくらしつ (恋三 616)

の如く今と完了時との時間的づれは瞬間にひとしいが、一旦完了した動作、状態は何ら今に投影していない。

才二は、とにかく、今よりも遠い或る過去に於て、動作状態が完了した漠然たる過去完了の場合で、

○ よしのがはよしや人こそつらからめ

はやくいひでしことはわすれじ (恋五 794)

○ 空蟬はからをみつつもなぐさめつ

深草の山けぶりだに立つ (哀傷 831)

○ いろなしと人やみるらんむかしより

ふかき心にそめてしものを (雑上 869)

○ とりとむる物にしあらねば年月を

あはれあなりとすぐしつる哉 (雑上 897)

がそれである。然し、いづれの場合にも、今における動作、状態と既に完了したそれとが異質的であると云う点では一致する。今と完了時の状態(動作)が異質的であると云う事については、

○ 花のごと世のつねならばすぐしてむ

木々の木の葉の散るとまがふに (秋下 259)

○ 花のごと世のつねならばすぐしてむ

むかしは又もかへりきなまし (春下 98)

○ (返し)

おきつなみたかしのはまのはままつ

なにかそ君を待ちわたりつれ (雑上 915)

○……わたつみのおきをふかめておもひ

てしおもひはいまはいたづらになりぬべ

らなり…………… (雑休 1001)

右の用例がよい参考になると思う。

次に「つ」の性質として考えられる事は、前述の瞬間的過去完了の場合に、「つ」の表わす時間、空間の範囲が非常に狭い事である。たとえば(512)の「思ひつゝぬればや人の見えつらん」の「見えつらん」、又(670)の「涙せきあへずもらしつるかな」の「もらしつるかな」、或は、(916)の「春の物とてながめ暮しつ」の「暮しつ」などせいぜい永くて(616)番の歌の一日である。しかもこのような用例は多く、更にもう二、三例をあげると

○ 春霞色のちぐさにもえつるは

たなびく山の花のかげかも (春下 102)

○ ぬれつつぞしひておりつる年のうちに

春はいくかもあらじと思へば (春下 123)

この事は、「ぬ」が、極限に達する迄に、きわめて長い時間経過を必要としたのにくらべて、对象的であり、従来、橋本博士などにより、「つ」は完了が急であると云われて

来た根拠が案外このへんにあるのではないかと思われる。

次に漠然たる過去完了の場合にも、かなり一致した性質が見られる。それは今日、接続助詞と云われているところの「つつ」に近い、反復、継続の機能を持つている事である。これは、「つ」が古く、「つつ」のであつたろう事を考えさせ、語源の作用が、尙痕跡的に残つて「つ」に一つの性格を与えていると見てさしつかえなからう。

(794)「早くこつつ」、(881)「なぐさめつ」(869)

「深き心にそめてしものを」、(301)「あはれあな憂と過しつるかな」などがそれである。然し、ここに云う「つ」は、いづれも過去の或る時期までの反復、継続であつて極限へのもり上りがない事で「ぬ」と区別される。

なお、古今集以外の作品に現れた「つ」、「ぬ」及びその接続関係については、いずれ改めて述べる事にする。

☆

☆

☆

☆

☆

入学してはや三方月。庭のダ  
リヤの盛りの頃初めての自炊生  
活に一喜一憂した時期も過ぎ、  
ようやく大学生生活に順応して来  
たようだ。四年間、長い様で実  
際には短いものであらう。その  
中で何かをやつてみたいと思ひ  
ます。(一年 叶美津子)

ちつとも勉強したくない時、  
講義をさぼりたい時、おいしい  
食べ物や、きれいな服が欲しく  
なつた時、親兄弟が苦勞して私  
を大学へやつてくれている事を  
思えば、そのようなぜいたくな  
と言えたものではない。出来る  
限り一生懸命勉強を頑張らねば  
ならぬ。(一年 瀬戸文子)

自分がどんな事態に直面して  
も、決して人を頼りにしてはな  
らない。頼るべきものは自分以  
外にないという事を常に忘れ  
ず、マスコミにひきずりまわさ  
れている現代の中で、冷静に自  
分を見つめる事の出来る、そう  
いう人間でありたいと思う。

(一年 三島富美子)

垂籠めたグレイの空を見てい  
ると、「何てつまらない日なの  
だろう」と思ひ、ブルーの空か  
ら太陽がほ、えみかける時、知  
らず知らずのうちにハミングが  
とび出して来る。

「人生は七転八起」―悲しい  
につけ嬉しいにつけ思ひ出され  
るこの言葉―古いサイン帳の一  
頁に黒々と書かれた七文字が、  
落胆せず希望を持って!!あまり有  
頂天になるな!!といつも呼びか  
けている様な気がして……。

(一年 杉焼シゲミ)

女子大無用論の唱えられる今  
頃、そんな言葉を撤回し、より  
豊かな教養を身につけ、より充  
実した学園生活を送りたいもの  
だ。最早や必要だけの時代は過  
ぎたのだ。無力ではあるが一步  
でも自分の理想像に近づいて行  
きたい。(一年 吉田泰子)

女子大に入つたら、あれもこ  
れもしようと多くのプランを頭

に描いたものだ。

いざ入学して夏休も近まるのに  
何一つ実行出来ない。  
〃実行つて本当に難かしいな―  
これが凡人の証拠かもしれない  
い。しかし頑張らう!

(一年 齊藤すみれ)

自分自身の良心に納得出来る  
世界に住む事こそ最も大切なこ  
とであり、又むずかしく、それ  
をなし得る人こそ真に強く立派  
な人であるとは私なりに考え  
る。(一年 嶽釜美智子)

どうして頭がいたくなるほ  
ど、熊本市内、特に新市街には  
人が多く集まるんだろうか、  
こんな所に住んでいると何んと  
はなしに田舎が恋しい。夏はキ  
ャンプをして楽しい原始的生活  
をするのも良いなあとと思う。騒  
がしくて夏はものすごく暑い所  
を離れて四年間の中に自然に溶  
け込む機会を作りたい。

(一年 花田元子)

〃機械が二度、君のドアをノ

ックすると思うな〃ジョン・フ  
ォール

私が何時も口癖にする言葉であ  
る。二度と来ない大学生生活をし  
つかりと自分のものにしよう。

(一年 奥田展子)

私の部屋からは、煙でさえき  
られたような山々と、生気のない  
家々ばかりしか見えない。でも  
私の好きなのは、四季の移り  
変わりがはつきり感じられる山々  
と、湖のような海だ。なぜな  
ら、そんなところは田舎だか  
ら。(一年 中村節子)

我々は、自己のみ見つめるの  
でなくして、身辺の学生運動  
や、現今の政治状態にも、目を  
向けよう。又学校の自治会に対  
しても、責任のない批判をやる  
のでなくして、実状を知り、よ  
り協力的であつて欲しいと思  
う。(一年 島津依子)

想像力を借りて、思想・感情  
を思う儘に表現出来る世界。そ  
れは、文学の世界以外の何者で

いう人間でありたいと思う。

れもしようと多くのプランを頭

機械が二度、君のドアをノ

れは、文学の世界以外の何者で

あろうか。そこには知識の泉が湧き、惜しみなくそれを与えてくれる。私達は今やこの理想の世界の門前に辿り着いた旅人である。(一年 吉田幸代子)

門をくぐりながら、今日は何時に帰れるだろうか、帰つたらパンを食べようか、そんな事をまじめに考えている。この心に私は何かの道をさがしてやりた

い。(一年)

透明な空気に身を包まれ視線を空間に投ずると同時にそれが闇と化し、それで身は包圍され自分の愛撫をうける。その果てに血は吸ひとられやつとの思いでドアに這い近づくが、いつも鏡がか、つている。私はこの時いつも存分勞泣するのだ。(一年 田淵富士子)

「私は自活している。」ということに感謝と誇を持つてはる。しかし、これをのぞいては常に劣等性の上に劣等感を常に与えられてる生活である。私は

学校生活の楽しさと共にそれ以上のさびしさを味わうのである。

受講態度が悪かつたと思う時と反面、つまらぬ講義だなんて帰る日より、さびしい日はない。日が経るに従つて親密になるべき先生との間も、反対にうとんじて行く先生も少くはない。はつきり言つた所、今の学校生活に、幻滅の悲哀を感じる

のである。

学生間と言うや、行き会つて会釈するどころか先生と行きあつてもおすまし顔というのが通例である。学問とか政治とか文学とか偉らそうに言う前にあるべき基がないのである。割り切るだけが現代人間ではなく、もつと必要に応じて情がないかぎり油のない商車がかきまわつているのと同じうるおいのない学校社会になるのではないかと案ずるのである。

(二年 北野タツ子)

いよいよ我等の夏、二度と来ない輝くばかりの青春を思う存

分有益に使いたいものである。

二カ月もの、自分というものに与えられた時間、はて、毎日限りないある意味での希望を持つて大学に通つているが、理想がやがて実現せんとする時、大きな喜びと共に大きな不安が心の隅に潜んでいる。それに対しては、ほとばしるエネルギーを以てたち向い、喜びを満喫したいものである。(二年 K・D)

去る七月二日自治会を失するに至つた我々は、今後の学内活動の有り方を考えると甚だおぼつかない感に耐えない。この様な大学生活に於いて害はあれど益となる事は僅かな事である。学生諸嬢一日も早く良き指導者を撰出しようではないか。

(二年 尾坂綾子)

人の意見を素直に受入れる人は進歩向上が早い。だがそれは、決して人の意のま、になるというのではない。批判性なるもの……それは私にとつて、女子大に入学して得た産物であ

る。(二年 西山淳子)

「歳月人を持たず」という諺がある様に、月日のたつのは早いもので、無知な私もどうやら二年に進級したらしい？しかしこの無知も「無知によつて誤り、誤つて後学ぶ」の諺の如く悲観せず少くとも知識ある人間になる様に努力したいものである。(二年 寺本孝子)

夏休み中の学校の図書館は全く静かである。県立図書館には入りきれない人が沢山いる。勿論書物の少ないのが原因だろうがそれにしても大学の図書館はもう少し利用者の多いものと思つていたが。……せつかく図書館があるのだから、利用者も多くあつてほしいし、図書館も学生の方でもつと書物を集め冬でも夏でも気持ちよく能率の上る図書室にしたいものだと思つた。

(二年 山辺満寿子)

大学生活の二年目を迎え、最早半ばを過ぎようとしている時、今までの生活をふりかえつ



(昭和三十四年度教育実習校名)

校名	氏名	期間	校名	氏名	期間
中央女子高等学校	池沢美保子 春田 藍子	6.15 7.4	湖東中学校	梅野 潤子 荒井 節子	6.15 7.4
白川中学校	奥村 久代 坂井 澄子	"	八代第二中学校	守田 靖子	"
出水中学校	高木シゲ子 寺内 幸枝	"	玉名中学校	浦田 英子 谷口 道子	"
京陵中学校	岩下 慎子 姫島多賀子	"	岱陽中学校	東 芙美子	"
城南中学校	上野 史子 福山 布威	"	山鹿中学校	大村ヨシミ 坂上 憲子	"
竜南中学校	紫藤 知子	"	稲郷中学校	尾方 宏子 鹿子木七生	"
藤園中学校	甲斐 聖子 木村 竜子	"	菊水中学校	平野 潤子 斉木 曙美	"
城西中学校	佐藤 アツ 杉川 至子	"	水俣第一中学校	福山 綾子	"
託麻中学校	杉本 栄子 上村美知子	"	山北中学校	松村 敬子	"
三和中学校	林田 京子 河村 玲子	"	上松中学校	東岡 正枝	"
江南中学校	白土ルリ子 村上 妙子	"	女子商業高等学校	今村 郁子 高宮 悦子	6.22 7.11
八代中央中学校	橋本美智子	"	大分県大野中学校	黒野 琴子	6.15 7.4
			(県外の部)		
			山口県	水田 愛子	"
			田布施中学校		

てみて最も痛切に感じることが、生徒間の信頼が欠けている様に思えます。ある事に当つて一応疑つてみる事は学問を発達させる上で重要なことではあります。が、つと他人の意見も慎重に聞き信用の念をもつことも必要だと思ひます。

(二年 藪田邦子)

週刊紙の洪水、マスコミの氾濫、もう誰もサックドレスを振り向きはしない。その激流の中で我々の思考力までが押し流されてしまふとしたら、それは悲劇よりは喜劇だろう。今一度我々は自分の足元をたしかめてみなければ……

(三年 森 麗子)

「すべて高貴な仕事は、最初は出来そうに思われなかつたものである。」とカーライルが言つてゐる。出来そうもないと思つて、始める前にやめることがあまりにも多すぎる者にとつては、常々心に留めて愛すべき言葉ではないだろうか。

(三年)

個々人の光を

四年 福山綾子

「初心忘るべからず」先ずいいたいのは、この言葉である。事を当るに於いて感ずる最初の心持—これを忘れることなく実習に當つたならば、成功であると言つても過言ではないと思う。となまじきなことをいつているが私の実習を顧みて、完全なものであつたと自負することができないのを残念に思う。

とにかく、教えるということは、むずかしく、困難なことである。一言にしていえばこの言葉につきる。しかし、常に困難が伴つてこそ、眞の授業ができるのではないかと思う。この困難をいかにして乗り越すか問題は問題を生みつぎる所はなかつた。しかし、そのむずかしさが解つた時、指導者として完成されたといえるのではなからうか。私の困難だつたと思う点を具体的に二、三述べてみよう。

一、発問方法—ある程度完全な答を（一部分の生徒からでなく）引き出せるような発問

の仕方、これは研究する余地のある問題として残っている。

二、板書方法—簡単なようで非常にむずかしいものである。実習に當る前に項目を板書して見る必要がある。

三、位置—これが又やつかない問題である。全部の生徒を自分の視野におさめる位置に立つ必要がある。とわかつていても、完全にできるようになるには、経験に待つより他にあるまい。大体この三点であつたが、

更に、教案だけに頼つては実のある授業はできないのではないかということを感じた。「教案にそつてもやつとの授業」というのを私の目標としていたが、見事に覆された。生徒の予習状態により、その場で指導方法を考え、変えなければならぬと痛感したわけである。これには、日常の学力ということもが必要になつてくるわけで、ここに於いて、学力の未熟さを判然と知らされたわけである。

又、生徒を内部的に知る。このことは、生徒の実態を知る上に欠くべからざるものであり、眞の愛情で結びつく上に大きな先駆けとなるのではなからうか。といつても、短期間では無理であるが、換言すれば、生徒との間

に距離をつくらぬということになる。しかし、それをどの程度に保つか問題は、貴族的であつてはならない。あくまで庶民的に、生徒の中に入り込み、一体とならねばならないと痛感したことを述べたわけである。

ここで私が強調したいことは、プリズムが七色の光を放つ如く、まずくともよいから、個々人の光を放つ、そのような実習をしたかつたということである。私自身、十分その光を放つことができなかったので、敢えて後輩諸子にお願いしたいと思う。その光が放れた時、一人の指導者としての自信と誇をもつてよいのではなからうか。

この実習という貴重な体験は、私をして、より高い人間完成をめざす糧としなければならぬと強く決心させてくれたものがあつたことを嬉しく思つている。

第一時限の思い出

四年 杉川至子

果して出来るだらうか、と教育実習の事を考える度に不安になり、それでも初めの頃は、なあと三年も勉強すれば、と思つていた。

ところが三年たつてみても一向に自信はつか

なかつた。それどころか、時間がたち実習が

迫ってくるにつれ愈々恐ろしいような気持ちになるのであつた。その何とも言いようのない不安な気持は、最初の時間の始業の鐘を聞く直前最高潮に達した。三年間時々頭を拾げていた不安が、今学年に入つて除々に切実さを増しはじめ、今日は愈々教壇に立つという朝はものすごい加速度をもつて高まり始めた。月曜の第一時限目だつたが、生徒朝会が終つてから始業の鐘を待つ間何もかも頭から抜けて行つてしまつたような気がした。逃げられたら逃げ出してしまいたい、そんな気持ちだつた。とうとう鐘は鳴りはじめ、そして鳴り終つた。もう逃げられないと潔く諦めて、準備万端整えて、否整えたつもりで教室に向つた。そして教壇に立つた。一旦立つてみると案外なもので馬鹿に落着いてしまつた。組に乗せられた鯉の気持というのか、糞度胸と言うのか、案ずるより生むが易しという言葉が頭に浮んだりした。これなら先ず大丈夫、生徒の顔も一重にしか見えないし、先生二人に教生二人、気になんかかけはしないぞと思つて本を開き教案と腕めつこしながらやり始めた。そこまでは良かった。

さて黒板に向つて……と思つたらはつと

した。チョーク！ チョークを持つて行くのを忘れていたのだつた。やつぱりのぼせていたのだ。チョークの事等思い及びもしなかつた。幸いにして半分位になつたのが一本あつたから何食わぬ顔をして続けて行つたのであるが、もしあれがなかつたら……今考えても胸が一つドキツとする。教育実習の第一時限目から「チョークを忘れましたから」なんてすまして言えはしない。それ以後は、鐘が鳴ると先ずチョークをと思うようになった。

教室に入つて礼をする前、持つて行つたチョークを黒板に置きながら、チョークの一片も見当らないきれいにそうじされた溝を見る毎に、最初の失敗が思い出されるのであつた。始業前の逃げ出したいような気持も二回目からは全然なくなつたというわけではないけれども最初の何分の一に過ぎなかつた。大研の時も怖いには怖かつたけれど最初程ではなかつた。

三週間、今迄と全く違つた社会に飛び込んで学んだ事、考えさせられた事は生徒の学習指導、生活指導の面からばかりでなく、教育者として、人間としての面からも色々な事があつた。しかし、今一番印象に残っているのは最初の時間のこの思い出である、というの

が偽りのない所である。

## 教生日誌の中より

四年 紫藤知子

すつかり晴れ渡つた六月十五日、教生第一日、不安と好奇心の入り混れた気持をもつて実習校に歩を進めた。急に変更になり、先生方への挨拶、今思い出しても冷汗の流る、思ひである。

クラス担任は二年四組、私の中学時代と同組で親近感を感じる。五四名の目が一斉注目冷静に装つた積りだつたが駄目だつた。Mと云う女の先生で、母親を思わせる。私はこの時、決心したのだつた。先生の子供になつた積りで頑張るぞと……そして早く生徒の皆さんに慣れることと、先輩の話にあつた様に、名前を憶えることを第一目標に立てたのだつた。

校長先生のお話の中に、義務教育があらゆる点に於いて、千差万別であり、そして肉体的にも、精神的にも、指導のむずかしいことをお聞きし、自分達も通つて来たところの中学時代と云う年令に於いて、その責任の重大さを再認識させられたのであつた。

畳の掃除に教室へ、ここは男の子の当番「先生かせしてはいよ。」との声、この一声に三週間を仲良くやつていけるぞと大変嬉しく思われたのであつた。見渡すと小人数だ、どうも怠ける者がいるらしい。これから三週間皆と一緒に室内の整美に働こうと心に誓つた。

午後の時間、クラスへ、壁新聞の作製、出来上つている子、初めからやらされている子、種々様々だ、その中で私の眼に一はやくとまつた子がいる、一人で何やかやと話している。知能の遅れた子で、男の子から「キチガイ」と呼ばれているそうだと先生のお話、大分手をやいたが少しは落着いてきているとの話、先生とどんな指導をとるべきかを話し合い、初めて指導する立場に立ち、恐ろしさと、大きな希望を与えてくれたのである。それ故、毎日の状態を觀察することを心に決めた。放課後、職員の学年対抗バレーホールに出場させられた。教生第一日にと私達は言い合つたものだが、この気持は一変してしまふ私のように運動神経の鈍い者でも結構楽しくやる事が出来た。そして教生第一日目という感じを少しもいなくことなしに六時過ぎに無事第一日目の教生を終えたのである。これらの諸問題を見出して、これからの三

週間、良き教師の卵として、私自身の発展と共に、早く寮囲気に慣れ、出来る丈、多くのことを学び取つて、無事済んでくれることを願つたのである。

第一日目に、出会つた問題、感じた事を教生日誌の中から拾ひ出してみた。

## 生徒を知るといつこと

四年 木村 龍子

三週間の教育実習は、環境と立場の違いからくる緊張の連続の日々で、心身共に相当疲労を覚えた。けれども、どんなに疲れた日でも、無邪気で素直な生徒たちに支えられて、笑いを忘れず希望を持つて生活することが出来た。

教育実習にあつて私が一番問題にしたのは、「生徒との接触、つまり生徒を知る」ということであつた。生徒を知るためには、私たちの方から積極的に生徒の中に飛び込み、そうして人間的な心の触れ合いがなされなければならぬと考えた。

生徒との心の交流を図るためには、まず生徒の顔と名前を覚えることである。このことについては、実習前に先生方や先輩の方からも

注意を受けていたので、一日も早く一人でも多くの生徒を覚えることに努めた。生徒たち一人一人の特徴を掴みながら、座席表とニラメツコをしていたので、ホーム・ルームの生徒(53名)は、三日日にはほとんど覚えてしまつた。声をかける時には、必ず名前を呼ぶようにしたが、生徒は自分が覚えられていることに気がつくこと、自己の存在を認められたという喜びのためか、非常に嬉しそうであつた。生徒たちは、教生に対して非常な関心と興味を持つていたので、生徒の名前を覚えることと同時に、私たちが自分自身のことについて、生い立ちや趣味などを話してやることも、生徒との間の距離を縮める最良の方法であるように思われた。

実習期間中は、何かと忙しくて時間的余裕がなく、生徒と遊ぶ時間は十分に持てなかつたが、それでも毎日の掃除を生徒と一緒にやつたり、広島の平和大会に贈るための千羽鶴を折つたりして、出来るだけ生徒と共に行動することに努めた。このように生徒と共に行動するということは、生徒一人一人の性格、肉体的特徴、関心、興味などを觀察する上に役立つばかりではない。それは、授業を楽しい寮囲気のうちに、スムーズに進めるための

重要なカギでもある。勿論、授業をスムーズに進めるためには、教材研究を充分にやり、詳細な指導案を立てておくことが必要である。充分な教材研究の上に立つて、緻密な指導案を立てるということは、指導者の立場に立つ者にとつて、少なくとも教生として忘れてならない態度である。しかし、どんなに立派な指導案が作られても、生徒の実態を把握していないならば、決して活気ある学習活動は望めないと思う。まず生徒を知ることである。生徒を知る——いかにも簡単なことのようにあるが、実際にはなかなか難しい問題であつて、わずか三週間の実習期間中に充分成し遂げられるものではなかつた。この実習を通して、私は、生徒一人一人を本当に理解するということとは難しいことではあるが、これこそがすべての指導の出発点であると思つて感じたのである。

## 可愛い小悪魔

四年 水田愛子

「可愛い小悪魔」これを田布施中学校一年一組の生徒に進呈しよう。彼等の目は弁当をおあづけにされた時、炎天下の農園実習時

そして週番勤務以外はいたづらっぽく、きらきらと輝いている。おなご先生としての三週間の実習中この自分の喜びも悲しみもすべて彼等の動きによつて規定されていた。

「教材に」舟・つりの話が出てくると愛すべくき坊主達は全然この教生を無視して自分達の経験談、空想談を勝手気ままに始め、あまりに強いイメージを持つている子はじつとしていることが出来ず、やおら立ち上つて身振り手振りよく演じている。この新米教師は時間をスムーズに運ぶために彼等に演技を中断することを敵かな声で命ずる。すると生徒達はおなご先生の声に驚いてあわてて各々の定位置につくのだ。一人の男生徒がぱつと挙手して「先生！うちの母ちゃんも○○の先生をやつちよるが授業には生徒が喜ぶようなもんをするんじやというちよるよ」とやり出す。それにつれて他のいがぐり頭も「そうだ」「そうだ」と頷く。ところが正あれば反ありでさわやかとまでは行かぬが「生徒たるものは」と一席ぶち出すとにわかにな、元の演劇舞台に変化する。しかしそこはよくしたもので道徳教育の徹底の為かどうか知らぬが、一、二分間の自己反省の結果再び私のベースの中に

すつぱり入つて来て、じつと身動きもしないで私をみつめているのだ。指名されて発表することに彼等は一番満足を覚え、こちらがまだ質問を發しないうちから彼等は心の貧弱な心の教生のうちを讀みとり挙手して指名されるのをせつかに動きながら待つている。ベルが鳴る!! 教頭・指導教官が教室を後にするや否や彼等は机や椅子につまつきながら私の周囲に集まつて来て口々に今の授業の批評をしてくれる、そのあい間には未来の美容師はこのパサ／＼髪をいじり出し、腕相撲横綱の名称を持つ私に小結が挑戦したり英国型紳士が「兄ちゃんのアルバム」と称するものを持参して私の少女期をそこに示してくれる。

人間という生物を対象に笑い、怒鳴るのであるからしてすぐ反響があつて非常にやり甲斐のある職業ではあるがその反面ちよつと押すとべこんと引込んだまゝ、なか／＼元通りにならぬスボンシケイキのようなソフトな心の彼等の杖となつて一歩一歩前進していかねばならぬ教師の立場は困難なものである。

批評の際「貴女はあれもこれも生徒に教えよう教えようとする傾向があるが一つのことを繰り返し／＼ゆつくり納得させる方法が彼等には適しているのだ。」という注意をうけ

全一編の月夜に逢ふし』…… 宿等の目しヨミ  
をおあづけにされた時、炎天下の農園実習時

分間の自己反省の結果再び私のペースの中に

には適しているのだ。」という注意をうけ

た。一人で力んで種々のことを考えさせ、教えようとしたことが結局は彼等の頭を攪乱させただけのことにはすぎなかつたのだ。今考えると舟や釣の話に大騒ぎをした彼等の気持も理解出来る。この生徒達は理解出来たい種々の知識を植えつけられることに負担を感じ自分達の生活に密接した舟やつりの話でせめてもの憂晴しをしたのであろう。

## 教育実習を顧みて

四年 春田 蒞子

教育実習の始まる一週間程前私は、「人間は自分自身に追いつめられた時に一番よく人間を発見することが出来る」という言葉をなにかの本で読みました。この格言を教育実習を通して体験した今では沁々と分る様です。このページに実習中の面白い失敗談等述懐したく思うが紙上の許す範囲で当時の心情を披瀝してみる。

教育実習第一日目生徒集会が終つて担任のクラスに案内され指導教官の先生が春田先生ですと紹介された瞬間私の名に先生という一段と高い敬称がつけられていることに胸がど

きつとなつた。教壇に立ち挨拶の言葉を述べながら生徒達の顔を一渉すると私と体つきも変らない生徒達、果して指導して行けるかと不安の念を抱いた。さすがに進学コースだけあつて皆真剣な様子が何われた。第一週の水曜日最初の授業を実施したその後で生徒達に私の授業の批評を無記名で書いてもらつたが三週間の授業を実施する上に大層有益だつた。生徒達の無邪気さ、純真さでもつて指導する者の真の姿を卒直に批評してもらい自分の気づかなかつたことを知り反省するとともに生徒達をも知ることが出来た。団体生活を営む上に於てはまずお互志理解することが大切であらう。

三週間の中でも三、四日目が一番精神的にも肉体的にも疲労を感じた。第一日は帰るバスの時間を待つのも、もどかしく夕食の買物をしながらまだ照りつけている日射しを背にして汗を流しながら歩いて帰る程の元気があつた。もし誰かその時「何が一番欲しい」と問われたらお金でも美しい衣裳でもなく、「休息が欲しい」と答える程、その頃の私には安眠がほしかつた。でも一夜ぐつすり眠ると翌朝は疲れも回復した新たな希望を抱いて登校出来た。教育実習を経験した誰でも吐露

することと思うが毎日／＼の時間が足りないということ、おまけに怠け者の私にあつては翌日の教材研究を終らないうちに時計が十二時を打つこともしばしばあつた。その上一日の実習日誌を記す仕事……私達はこの実習中友人同志お互いに鼓舞し合つて来たことがどんなにか心強かつた。指導する立場に直面して痛感したことの一つは生徒達に知識を与えらるゝということは自分で教材を消化しきつてから後の段階だということ自分で予習していたら説明してやる言葉が稚拙なものであつても自信の持てる指導が出来るということであつた。私は教育実習は社会生活に入る前の人生試験だと思ふ。果して自分にどの程度苦難に耐えうるか、自己を知り、自己を容赦なく吟味することのよい機会である。今から教育実習のことを気にしておられる人がいたら一足早く経験した私の言分は心配御無用だと申しましよう。学生生活の範囲では「不可能」という言葉が通用しない様に何事もやれば出来るということ、人間は順応することの出来る特権が備わつていて、ということを学びました。最後に教育することのむずかしさを理解するとともに教師の世界にしか見えない出されない「よさ」を伺うことが出来た。

## 理論と実践

四年 高浜慶子

教育実習が終つて今日で十日あまりになるが、様々な経験の中より、嫌だつたこと、苦しかつたことは浄化されて、今は楽しかつたこと、嬉しかつたことのみが思い出される。

大学では「教育原理」「教育心理学」「教育法」と教師になる為の専門課目を幾らか勉強して来た。しかしこれ等はあくまで理論であつて、実践即現場の教育とはずい分違つてゐる点があることを強く感じた。

1「生徒の立場を理解すること」2「生徒の氏名をよくおぼえること」3「教育に対する強い信念を持つこと」4「深い愛情をもつて生徒を見守ること」等実習前にはよく考え友達とも話合つてよく理解していたつもりであつたが現場に直面してみても、これ等をいかに処理するか、実行したらよいか、と途惑うばかりであつた。ここに理論と実践との関連づけ方、実行のしかたの困難さがあると思つた。

これ等一つ一つを検討してみても、ま

ず「1」であるが、私自身小学校より大学まで怠けてばかりで、考查が大嫌いなので、生徒達も私の高校時代と同じに思い、試験の問題は優しく、採点もつい甘くしようとする。こうならぬ様にあくまで教育者の立場で、冷静な目で生徒の立場を理解するかとすると、難しい点ばかりである。「2」もこれは人の特徴にもよるが、私の様に人の名前を覚える事の苦手にとつては、苦痛にも備へることである。初めに級の役員名簿を作つてもらつたが、それ〴〵二人づつなので、その二人の区別がつかない。又、先生に注意されたり、変な質問などで覚えた場合、その生徒に会う度に最初の事が思い出されて気の毒になつたりする。後ではみんなの名前を覚えた風をしてしたが、これはすぐ生徒にもバレて、「代議員の名前ばかり覚えなくて皆の名前も覚えて下さい」とアンケートに書いてあつた。「3」と簡単に言つても、生徒にいろいろ注意したり、意見したりする場合、自分の生活をふり返つてみると、矛盾することはばかりである。「規則はよく守りなさい」「お掃除はきれいに」「帰道はより道しないで」「あくまでも本校の生徒ということにほこりをもつて」等々言つてもこれ等はそのまま、教師で

ある自分に反省をもとめてゐることである。今はこの程度でよいが、結婚した場合、母親となつた場合、一人二役も三役も務めねばならず、教師の負担は重くなるばかりで、その矛盾もますます大きく相互に壁が生じて来ると思う。いかにしてその壁を開拓するか人間形成に役立てるか、教師として最後につきあたる問題はこれであると思う。「4」これは教師でなければ味わえぬ、教えることの喜びもあり、愛即知で自然と愛情もわくし、それによつて理解することも出来るものと思つた。

右の様に教育実習での全般的な感想をのべて来たが、これまで十六年間の勉強をよく理解した上で、教師に対する誇と熱意とをもつてぶつければ、人間の壁の志野田ふみ子先生ならずとも、素晴らしい先生が生れるのではないだろうか、実習が終つたばかりの時は自分の無知に対する劣等感で、教師になることに、ほとんど、失望してゐたが、今又、教育実習をふり返り、「教育原理」など読み返してみると、又いくらか、教師に対するフアイトと希望がわいて来つゝある。

け方、実行のしかたの困難さかあると見へ  
これ等一つ一つを検討してみても、ま

### 教育実習を回顧する

四年 尾方宏子

○ 清純に澄める瞳に裁かるる如く気負い  
て教壇に立つ

○ 先生の我を「先生」と呼びくるる生徒  
慥まこといれる縁かき蔭かげに歩を止む

最初の経験にとまどいながらこのような気持  
で送つた三週間であつた。生徒達から隔絶し  
てしまつた今私をつゝむものは、さびしさと  
空虚感のみである。このように生徒たちをば  
なれた教師というものはありえないことをし  
みじみと思うのである。

研究授業の前日、私達二人（国文科四年鹿子  
木七生さん）山鹿中学の先生の御指導のもと  
に夜の十一時頃まで学習指導案の欠陥を訂正  
したり、原紙をきつたりして明日の研究授業  
にそなえたあの貴重な体験は、私にとつて終  
生忘れられない楽しい思い出として私の心に  
深く深くきざまれることであらう。私達にと  
つて何よりもありがたかつた事は、私達が行  
つた授業に対して毎時間先生方の御批評を承  
つた事であつた。しかも建設的な御意見であ  
つたため私達はすぐにその意見を加味しそれ

つて」等々言つてもこれ等はそのまま、教師で

を土台にして次の授業に挑むことが出来た。  
この三週間に於いて一番私の心に深くしみた  
ものは、人間の心のあたたかさであつた。

熊本からバスで一時間余という山鹿まで二度  
も足をおはこび下さつた村中先生の御厚情に  
私達深く深く感謝申し上げます。尚山中の諸  
先生方の御懇切な御指導ふりは私達の心に深  
くしみるものがあつた。私はこの期間中に一  
点のいづれも許されたい教育の世界の清潔  
さ（それは学問の世界の清潔さと厳しさに  
共通するものがある）に強くひかれ、精魂を  
傾けて努力することのよろこびを味う事が出  
来たし又自分をこれほど練磨することが出来  
た日々もなかつた。教師が誠意と情熱をもつ  
て生徒に臨む時、いかなる生徒もそこに立派  
な人間の姿をとり戻してくれることを体得す  
ることも出来た。これが私のよろこびであつ  
た。

### 「自信をもつて」

四年 寺内幸枝

教育実習三週間は、アツという間に過ぎて  
しまつた。教師を志す者は、必ず経験しなけ  
ればならないこの教生、先輩にいろ／＼と話

をきかされていて、不安という気持は全くな  
く、ゆかいに過ごせそうだ、という気持で実  
習生活にのぞんだ。教育原理や教育心理学で  
一応の事は勉強していたが、実際、指導に当  
つて、紙の上ばかりでは得られない、もつと  
多くのことを経験によつて得られた事は、最  
大の収穫である。何ごととも経験しなければ、  
真に物ごととは理解出来るものじやない、とつ  
く／＼思つた。実習校の出水中学は母校で、  
七年前おならいした先生も居られたというだ  
けでも心強く、元気いづばい頑張れたといえ  
る。

ホーム・ルームは、一年三組で男女あわせ  
て六十名。一年生で、週番がつける教室の整  
理整頓、掃除の状態がいつも10点満点をもら  
うのは、このクラスだけ、というのでもわか  
るように、非常にきちんとかたづいている。

生徒の成績も、一年全体の成績順番で上位  
をしめる者が多いだけに、私が授業した一組  
二組、三組、四組のうち一番活発に授業が行  
われたように思う。予習を必ずやつて来るの  
で進み方もスムーズにゆくわけである。

教生第一日目に、各クラスの席順表を作  
り、それをもつて、授業参観にのぞんだ事  
は、あとで自分が指導する時、大いにプラス



されたことである。本当に、名前を覚えるということは、教生を大きく左右することである。授業中は勿論、掃除や、短かい休み時間にも、教室へ行って生徒と交り、少しでも生徒を理解しようとつとめた。話をし、行動を共にして、はじめてその生徒、そのクラスの特質というか、そういうものを解することが出来ると思う。

授業をやるにあたって一番気をつけた事は、活気のある授業をし、かた苦しい授業にならないようにすることだった。即ち、生徒を楽な気持ちで勉強させる事につとめた。二年生の授業も参観したが、一年に比べて、挙手、発表も消極的で、生徒を授業にひきこんでおく事は、一年生よりむずかしそうだ。授業内容が完全でも、生徒がついて来なければ意味がない。こゝで、長い経験が、ものをいうのである。

詩を教えるに当つて、予備調査をして、そのクラスの事態を知つて授業した事はよかつたと思う。詩が好きか、きらいか、その理由。詩を作るのが好きか、きらいか、その理由。といった項目を五つほどあげて、統計を出し、クラス全体の詩に対する意識の程度を知つて指導にあつたわけである。方言を説明する

際には、彼らの書いた作文に資料を求めた。日常つかう言葉、事柄を例にひいて説明し、時には脱線し、笑いをおこし、常に、相手は一年生であるとおつたのを頭において指導にあつたので、大きい失敗もせずにすんだ、いろいろ考えれば次から次に反省される事もある。板書の事、声量の事、教材の事……と。生徒をよく知る事、自信をもつてやる事が最も大事である。

短かい三週間ではあつたが、有意義なものだった。

## 生徒と共に山で過して

四年 福山布威

雨かともがうせ、らぎの音、耿々と冴える山の月にいつになく眠りを妨げられた私は、生徒の鼾と寝言を聞きつ、山の第一夜を明かした。三張りのテントは有明の月に白く浮き出されてまだ静まり返つてゐる。

教育実習も終つて半月過ぎた今、私達教生六名は実習校の御厚意により、阿蘇地獄温泉での林間学校へとやつて来たのである。食事助言者という立場であるが、キャンプの経験

は始めてで、責任を感じつゝも、半分は生徒にたよつた気持ちであつた。この三日間、三班二十五名分の食事を如何にして作るか、男子ばかりを担当させられた私は、自信がないだけに統卒出来ないのではないかと恐れた。しかし、三週間馴染んで来た生徒は今までより以上に親しく、姉弟同様の気安さで云うことに従つて働いてくれ、最初の夕食は珍味極まるカレーライスに舌鼓を打つたのであつた。

やがて興奮に少し早く日が覚めた生徒と、今日のピクニックのエネルギー源たるべく、栄養たつぷりのお味噌汁を作つた。三鍋も作つているうちには、飯盒炊飯の生徒は待ちきれず、食前に歌う「御飯だ御飯だ」の歌もどかしく、おかずなしで食べているしまつてある。残飯整理係と生徒に囃されながら遅い朝食をとるともうピクニック出発の時間。登山は人を作るとか、火口までの細い道は或は山間を或は尾根を曲りくねつて、二時間余りの登山は相当の忍耐とフアイトを要した。私と同じ様に疲れた生徒を励ましてやつと登りついたものゝ、下りの辛さは一入であつた。おにぎりや腹ごしらえをした生徒は、元氣をとりもどしておしやべりしてくれるが、登山

体勢が充分でない私は、強い西日に照りつけられ、痛む足を機械的に運んでいった。これから又三つの班の夕食の用意かと泣きたい気持ちになりながら。ところが、今夕は料理コンクールとあつて、生徒達は疲れも見せずに、各班機秘のうちに腕をふるっているのである。私の班もいつの間にかおもしろそうな焼飯が出来ていた。男の子ばかりでよくやつたと感心しながら、私もビタミンを提供して魚彩を添え、審査に望んだ。結果はキャンアプアイヤー後発表され、はからずも私の担当した第三班が第一位。賞品に大きな箱をいたゞいたが中にはキャラメルが二箱あつたとか。しかし、生徒は大喜び、「先生が上手だから」といたゞらずに子にこやかに云つてくれた。賑々しい彼等も日没と共に静かになり、キャンアプアイヤーは敵爾たうちにも楽しく行われた。「栄火の祈り」の合唱は木立に響き、目をとじて楽しかつた二日間をかえりみる。思う存分かけ廻り、腕白ではあるが素直な彼等を相手に立働いたことが、始めての山の生活を楽しくしてくれたようである。実習期間からこの林間学校までを通して、中学生は愛すべき可愛らしいものだという印象を強

くしたことは大きな収穫であつた。

私は満足感にひたりながら、残り火のもとで夜の更けるのを知らず歌い続けた。

以上

## 中学三年

### という年頃

四年 奥村久代

県下のモデルスクールとして知られている白川中学校(出身校)へ実習に行つたのだが、初めて教える立場になつて、教えることのむずかしさ、先生つてこんなに忙しいのかしら……とつくづく身にしみて感じた。のんびりした大学生活を送つてきたからか……

私のクラスは三年では二番目に勇ましく賑かだと云われている三ノ五のホームルームである。女の先生だが、とてもあつさりしていらつしやつて面白い先生。三年ともなると私よりもずつと大きい男の子や女の子が大分いる。体だけは全く大人であるが、なんとたく無邪気なところがある。

五クラス受持つて、平均五時間ずつ教えたが、クラスによつてそれぐタイプがある。

「初めは大人しいが、素直に発表するクラスをやつてごらんなさい」とおつしやつたので期待していつた。ところが全く発表してくれない。これが一、二年だと「ハイハイ、ハイハイ」とうるさい程手をあげて教室中響きわたるような大声で答えるのに、三年生は蚊が鳴く程の声しか出さない。一年生ならどんなに授業がしやすいだろうと羨ましかつた。でもだんぐ慣れるに従つて楽しくなつてきた。

三ノ五以上に元気がよいと云われている三ノ三、このクラスだけは先生も恐れて、私には授業をさせて下さらなかつたが、ある日、先生が「このクラスもしてごらんなさい」とおつしやつたので、やつたが、第一時間目から、とてもこのクラスが好きになつてしまつた。と云うのも、私が教室に入ると、皆んなニコニコ顔、どんな教え方をするのかと云う好奇心があるらしい。ここでは、ク海外の文化クと云う單元の中のク古都エティンバラク(北村喜八氏が国際ペン大会に出席した際の紀行文)だつたが、導入の所で、各国の特徴を聞いても、立つて堂々と答えるし、「今外国へ行つてもいいと云つたらどこへ行きたい?」と尋ねると、「フランスはモダンだから行きたい」とか答えるのである。「先ずここ

を誰か読んで下さい」と云うと一斉に手をあげる。「○○君」と云つて当てたら、「わあ、あれにあてて僕にはあててくれんけんね」と云つた具合で、他のクラスには見られない程活発なのである。残念ながら、このクラスは二時間しか教えることが出来なかつたが、ほんとうに楽しい授業だつた。

この三週間と云うもの貴重な経験ばかりだつた。

十のことを教える時は、百位の勉強が必要、先生と云うものは教えるだけではない、生徒の心を傷つけず、しかも正しい方向へと導き、人間性をも造つていかなければならぬのである。

何と云つても、教材研究と努力が常に必要である。

## 「教育実習を顧みて」

四年 白土ルリ子

大学に於て学んださ、やかな教養を抱きしめ、興味と期待に大きく胸をふくらませ、初めて実習校の門をくゞつたのは、ほんの昨日の様な気がしていたのに、瞬く間に三週間と

いう実習期間を見送つてしまつた現在、先生の誰もが味わう、あの登山家が頂上を征服した時の気持ちにも似た複雑な感激を身体一杯に感じ取るのである。

今、静かに実習期間を振り返つてみると、非常に様々な思いが甦る。その期間中、私は実に、生徒の事、教師という事を、ぶつ続けに考え通した。短い期間ではあつたが、こんなに一つの事を集中的に考え続けたことは、何だか今までに無かつた様にまで思う程である。そこから実に様々な事を感じたし、勿論、批判も起つた。が、その中で私が最も痛切に感じ取つた事は、〃先生にとつて、否、教師にとつて一番大切な事は、一人一人の生徒を本当に理解すること。これが全ての指導の基盤になるのではないか。〃という事であつた。こう一口に云えば至極簡単に聞えるが、これこそ実に老練な教師が一生か、つても満足出来なかつた事であつたのかもしれない、まして私達教生が短い実習期間中に、なしお、せる仕事ではあるまい。事実、私もどうやらその点は落第なのである。

どんなに立派な教案作成を計つても、どんなに卓越した弁舌をふるつても、生徒の気持ちのわかつていない、生徒の雰囲気の中に溶け

込んでしまつていない指導者というものは、他から眺めて随分滑稽なものとなるであらう。指導者として、少なくとも教生として、詳細な授業案や指導技術は是非とも大切なものである。が、もう一つ、そこに生徒との気持の交流があつてこそ始めて、本当に立派な素晴らしい授業も生まれて来る訳である。今後、教生に行かれる方々は、ホーム、ルームでも休憩時間でも大いに利用され、出来るだけ早く生徒に慣れ、生徒にも自分に慣れてもらう様努力される事をお勧めしたい。第一にそれに成功すれば、きつと心弾む楽しい授業が展開される事と思ふのである。

〃対象になるものを知る〃という事は、教育のみでなく、全ての面に適応される真理でもあらう。私はこの教生期間中に、雑念を克服して一心に生徒と一体になる修練がいかに必要であるか、を笑に強く感じとつたので、敢て特筆した。

教生の思ひ出は、永遠に褪せぬという。私もこの教育実習を通して、教職の尊さと、困難さとを、泌々理解することが出来た。この貴重な体験は、きつと今後の生活に何らかのうるおいを残すものと信じ、得がたい人生の一頁を演じることが出来た事を非常に満足に思つている。